

時代の証言者

2003年夏、47歳の時、障害者福祉の仕事を担当することになりました。公務員人生で一番きつい仕事だったかもしれません。

この年の1月、厚生労働省には障害のある人たちが大勢詰めかけ、建物が取り囲まれる事態が起きました。寒空の下、厚手のコートを着た重度の車いすの人、何人もいました。

4月から「支援費制度」という新しい障害者福祉の制度が始まるにあたり、利用者が増加して財源が足りなくなる恐れがあるため、厚労省は市町村への補助金に「上限」を設けて自治体や利用者間の公平を図ろう

20 厚子 村木 官次 の 罪 免

としていました。それに反対した障害者や支援者の人たちが抗議に訪れていたのです。

▲支援費制度は、これまで行政が決めていた福祉サービスを利用者が自ら選び、契約することで、地域で自立した生活を送れる仕組みを目指した。しかし、制度を利用しやすかったのに、保険料を創設した介護保険制度のような財源確保策がなかったため、制度導入初年度から財源不足が露呈した▼

1月の頃は担当ではなかったけれど、なぜ取り囲まれたのかと思うじゃないですか。省内の勉強会に顔を出していたら、あいつは毎回勉強会に来ている、調整の仕事は向いていそうだから担当させてみよう、とな

支援費議論眠れぬ日々

ったようです。理念は良くてもお金の手当てがないため、補助金を使い切ったらし町村が自分で持ち出すか、福祉サービスが削られるかしかない。それは避けたい。省内を回って予算を付けてくれるよう頭を下げ、必死にお金を集めました。でもこのやり方は限界があります。

関係者が集まった検討会に私も関わることになり、二つのことを心に決めました。当時、障害者団体と厚労省の関係は険悪でした。まず、障害者の人たちの話を徹底的に聞くこと。次に、

客観的なデータをそろえ、データに基づいた議論をすることです。



支援費制度をめぐり、厚生労働省の方針に抗議しに、厚労省前に集まった障害者の人たち（2003年1月24日撮影）

障害者福祉を良くしたいというゴールは一緒ですが、途中で意見は割れても建設的な議論ができればと思っています。でも、いざ会議が始まると空気がも

のすくすくヒリヒリして。胸のあたりがヒリヒリして、泣きそうと思いつながら仕事をしました。

議論の中で、介護保険制度と統合するという話もありました。

▲「介護の社会化」を合言葉に2000年に始まった介護保険制度は、40歳以上の国民が保険料を負担し、原則65歳以上の高齢者がサービスを利用する。負担年齢を40歳から引き下げ、若い障害者も介護保険サービスを使えるようになる案が検討された▼

この案は実現しませんでした。サービスの内容や自己負担などへの不安から、障害者側から懸念の声が上がったこと、介護保険側も障害者まで対象とすることに躊躇を感じていたからです。ではどうするか。眠ろうとしても眠れない日々が続きました。

(編集委員 猪熊律子)